



矢立峠

村雨退二郎



北辰堂

相馬大作

矢立峠

昭和三十一年三月十日 印刷
昭和三十一年三月十五日 発行

定価二四〇円

著者 村雨退二郎

発行者 千葉榮助

印刷者 西村徳次

発行所 株式会社 北辰堂

東京都新宿区津久戸町二〇
電話・九段(33)三二〇一
振替口座東京一四三二四二

印刷製本 東陽印刷製本株式会社

万一乱丁落丁の節はお取り換え致します

Printed in Japan

長編小説

矢

立

峠

本編 相馬大作

猛烈極まる実用流	七
津軽境の関所	二三
見知らぬ騎馬の士	三六
怒れる良助	四六
天台寺文書	六四
石段を下る人	七一
お磯の心配	八三
平山兵原先生	九一
運命の手紙	九九
講武始めの夜	一二四
刀工大吉の思案	一三六

演武の仮想敵	一三四
生還を期せず	一四〇
矢　　立　　峠	一七五
智恵の戦い	一九三
生死の彼岸	二〇七

外編　女　大　作

見舞客ふたり	二三七
八年だけの自由	二四三
半七はどこに	二五一
緋　衣　の　僧	二五八
南部坂のお屋敷	二六〇
十二支雌雄の手裏剣	二六五
人殺し請負業	二七四

本
編
相
馬
大
作

猛烈極まる実用流

—
兵聖閣道場のあるじ、下斗米秀之進（後の相馬大作）が目を覚ました時には、妻のお磯はもう起きて、お勝手で朝飯の支度にかかっていた。

お磯は非常に勤勉な女だ。ただ江戸の生活と、南部の田舎の生活とは、いろいろ勝手がちがうので、三年前に江戸からつれて帰る時には、その点が多少気がかりだったが、案外早く、田舎の生活にも慣れてしまった。老父の気にも入っているし、兄夫婦も実の妹のように可愛がってくれる。

道場の方もどんどん門人がふえて、金田一（きんだいち）の前山に、新らしく道場を建築する景気だし、お磯がこちらへきてから生んだ長男の秀藏（ひでぞう）も丸々とこえて、もう三つになる。

秀之進にとっては、万事申分なく順調に進んでいる。

秀之進は、質素な小倉の袴をきちんとつけると、縁側に出て、雨戸を繰くった。

「お目ざめでございますか」

雨戸をすっかり戸袋におさめた時、お磯が洗面の水を盥たらひに汲んで、暗い軒下へ運んできた。

「お客さんは起きているようだな」

「もう小半時も前から起きていらっしやいます」

秀之進は、悪意のない苦笑をうかべた。

「旅馴たびなれないので、落着いて寝ていられないのだろう。まだ若いからな」

棕櫚しゅろ緒の粗末な庭下駄をつっかけて、お磯の手から手拭を受取った。お磯は自分のことをするために、すぐ軒づたいに勝手の方へ帰って行った。

秀之進は顔を洗った水を、霜柱しもばしらの立った庭にまいて置いて、道場の方へ歩いて行く。

外はまだ暗かった。空には氷の欠片かけらのようなつめたい星が、幾百千とも知れず、青白くまたたいていた。ただ、左手の北上山脈きたかみえみやくの上だけが、ほのかに白しろんでいるので、夜明けの近いことが知られるばかりである。

当番の塾生ももう起きているとみえて、道場の武者窓むしやまどから明りがもれている。

道場は、もと塾屋なやだったのを取払とりひらげたもので、最初は広すぎるかと思われたのに、わずか三年足らずで、もう門人を收容できなくなってしまった。秀之進の門人は現在ほとんど三百人を算え、この南部の福岡ふくおかでは第一の道場だった。

もちろん大きな都会——城下に行けば、もっと大きな道場はいくらでもある。

だが福岡は城下ではなくて、代官だいくわんがいるだけの土地である。豊臣秀吉とよとみひでよしの時代には南部家がここに城を築いていた事もあったけれど、その後南部家は盛岡に移り、城はこぼたれてしまった。同時に侍もほとんど盛岡に引移って、あとには福岡通御給人ふくおかがきひきゆうにんという侍だけが残った。これは南部領地の北境ほくきょうを守るための駐屯兵ちゅうとんへいのようなもので、皆由緒ゆいしよのある家柄だし、藩から相当の家禄も与えられている。秀之進の家もその一軒で、知行は百石、父宗兵衛そうべゑが年老いて隠居いんきよし、今では兄平九郎の代になっている。

そうした特殊な土地で、しかも兵学へいがくは謙信流けんしんりゅう、剣は戸卜とく一心流、槍は新当流しんとうりゅうと、ちゃんと昔からきまつている所に、実用流武芸じつようりゅうぶげい十八般という耳馴なれないものを輸入して来て、福岡第一の道場を築くなどということは、まったく保守的な気分の強いこの土地としては未曾有みそいうの椿事ちんじである。

実用流が「奥の武士おくのぶし」の剛健こうけんを尙たうとぶ土風に合ったとも云えば云えるし、若くして兵原門下四傑へいげんもんしよしよの随一ずいいつと謳うたわれ、長沼流折衷ながぬまりうせつしゅうの兵学以下、火術ほじゆつ（炮術）、弓、槍、剣、馬、やわら、水練すいれん、忍びの術に至るまで、あらゆる武芸の蘊奥うんおくをきわめた秀之進の実力が、他の流派を圧倒あつたうしてしまつたとも云えるだろう。

ただ以上の事情の外に、どうしても見のがしてはならぬことが一つある。「時勢」ということだ。

寛政以来、にわかに北辺が騒がしくなってきた。東進してベーリング海峡まで達した露西亜は、今度は方向を転じて、侵掠の手を南に伸しはじめた。樺太、千島、蝦夷と、次第に南下して来た。掠奪、放火、暴行事件は、頻々として起り、それまで北地に対して松前侯まかせだった幕府も、はじめて事の重大であることを覺つてにわかに蝦夷を直轄地にしたり、津軽、南部以下諸藩の兵を派して守備を固めたりしたが、露西亜の執拗な侵掠の策動は一向にやむ景色がなかった。

どうしても強い一撃を加える外に、この侵掠を断念させる途はない。それをやるには強い兵がいる。古い兵学と、実用価値のない飾り武芸しかやっていない今の侍では、とても役に立たぬ。国家の危機をはっきり覺つた、新しい強い兵が必要だ——というのが実用流の根本精神だった。その精神が、福岡とその近郷の御給人や郷士の青少年をふるい起たしたのである。

兵聖閣は、発展の一路をたどっている。三百の門下生は、猛烈な実用流の鍛錬によって、日々精兵へ精兵へと完成されて行く。秀之進はそれをこの上もない満足の日で、凝乎と見守って来たのである。……霜柱が歩くたびに、さくさくと爽やかな音を立てて碎ける。

道場に隣あった土蔵の前まで来た時、秀之進は訝しそうな顔をして足をとめた。

土蔵の屋根へ、長い梯子が一挺立て掛けてあるが、そこは平常梯子などの置いてある場所ではなかった。下を見ると、下駄が一足脱ぎすててある。

秀之進は梯子を登って行った。

薄明りの中に黒い人影が見えた。その男は土蔵の棟瓦むねがはらに馬乗りになって、何か細長い竹筒のような物を、頭の上へ向けている。秀之進が登って来たのに気がつかない様子で、ひとり何か口の中で、ぶつぶつぶやいている。

「おい」

そう低い声で呼ぶと、男はびっくりして、棟瓦に手を突いた。

「おどかすない、すんでのことに墜落ついらくするところだったぞ。誰だいったい？」

「惣藏めし、お主そこで何をしているんだ？」

「あ、先生ですか」

「何だそれは？」

「望遠鏡ぼうえんきょうです」

「そんな物を持出してどうする気だ。まだ暗くて山も川も見えはすまい」

「いや、私は星を観測しているんです。周易しゅうぎと天文てんもんは密接不離の關係がありますから、一つ徹底的にやって見ようと思って、先達せんだちから天氣の良い朝は必ずやっておりますが、実に天文というものは興味津々しんしんたるものがありますな」

「まあ下りろ」

「はあ」

「天文も地面でやれぬわけではない。朝早くからそんな所に上っていると気が変になるぞ」

「たしかに高い所に登ると、下界の万物が小さく穢く見えますよ」

「それが変になりかかった証拠だ」

「でしようか」

「富士の絶頂に登ってみたところで、下斗米惣藏はやはり下斗米惣藏だ。人間は、いつでも自分を忘れてはならぬ。下りろ」

「はい、どうも仕方がない、それぢやア下界に下りて、元の俗人にかえることにしましょう」

惣藏は、望遠鏡を肩にかついで、秀之進のあとから下りてきた。

下斗米惣藏は、秀之進の甥に当る青年で、槍術も達者だし、特に手裏剣の妙手だったが、最近どうしたはづみからか、ひどく易にこるようになっていた。

「惣藏」

「はア？」

「お主の、易に対する考え方は間違っている。もうすこし易を学ぶのは、先にした方がいいぞ」

「なぜですか？」

「易の目的は人格陶冶だ。お主の易は占いだだけの易だ。売卜者流の易に墮している」

「しかし八卦占いも、当れば実用の価値があるでしょう」

「お主の易が当るのか」

「どうしてどうして、百発百中ですよ、絶対に外れることはありません」

「俺には信じられぬな」

「じゃあ、一つ予言をしましょうか。昨夜の卦に現われた事を一つ。これが外れたら以来算木筮竹は一切手に取らぬことを誓います」

「面白い、何だ？」

「明日、即ち今日です。坤の方角から先生に助けを乞う者がやってきます。義侠心の強い先生だから、その求むるままに救助してやろうとなさるが、これを救助なさると、後日必ず先生を九死の深淵に突落しますから、決して救助なさってはけません」

秀之進は、笑いながら道場の土間にはいった。

「当りそうもないぞ」

「いや、絶対確実です！」

「外れたら当分、易も天文も禁止するぞ」

「はあ、甘んじて仰せに従います」

惣蔵の自信は岩石のように固かった。

(後日、九死の深淵に突落す) という言葉が頭に残ったが、秀之進はそんなことが気になるようでは、まだじぶんの修養が足りないのだろうと反省した。

秀之進が袴の股裁をとると、塾生三十数人中の最年少者、今年十四になる一条小太郎が、自分の身長何倍もある長い真槍をかついできた。

大身の直槍で、天草檜の柄は一丈三尺ある。千段巻から石突まで鉄の芯が通してあるので、たんなる附の稽古槍なぞとは、比較にならぬほど重い。

秀之進は、手早く白鞆の襷をかけるのと、

「小太郎、潰れそうだぞ」

と笑いながら、その肩から槍を受取った。秀之進の手に移ると同時に、槍は急に軽くなったように見えた。軽くりゆうりゆうと二三度しごいてから身構えをして鋭い気合と共にくり出した。刺撃一万回、これが江戸の兵原草廬にいた頃から、ずっと続けている日課のひとつだった。

三

風がないので障子を開けてあっても、それほど寒くは感じられない。朝の日光は、縁側までさしこんでいた。

「今朝の粟飯は、非常に美味しく頂戴しました」

若い客はそう云った。客は名を細井萱次郎と云って、元祿の大学者細井広沢の血を引いた江戸